

鷗外がハルトマンを選んだわけ

坂井健

〔抄録〕

没理想論争時に森鷗外がハルトマンの思想によったのは、ハルトマンの『無意識の哲学』に反ダーウイニズムの発想を読み取ったからだといわれるが、ドイツ滞在時にはまだ本書をひもといてはいない。ではなぜ鷗外はハルトマンを選んだのか。それはドイツ滞在時にシュヴェーグラーの『西洋哲学史』を読み、そこで紹

介されているハルトマンの考え方、すなわち、現象世界に理性的なものが現われているとの主張に感銘したからである。

キーワード 没理想論争、森鷗外、ハルトマン、

シュヴェーグラー、無意識の哲学

はじめに

近代文学史上最大の論争とされる没理想論争をはじめ、明治二十年代における鷗外は、E・V・ハルトマンの思想に拠ってその旺盛な批評・評論活動を展開した。その批評・評論活動は、絵画論、小説論、戯曲論、哲学論など、実にさまざまな方面にわたっている。いわゆる戦鬪的啓蒙批評の時代である。

ではなぜ、鷗外はハルトマンの思想に拠ったのであろうか？なぜハ

ルトマンを選んだのだろうか？

一、鷗外の帰朝後の興味

一口にハルトマンの思想といっても、論争時に鷗外が拠ったのは、彼の代表的著作である『無意識の哲学』と彼の美学上の著作である『美の哲学』この二つである。つまり、ハルトマンと鷗外の間関係を考えるとき、この二つの問題があり、それぞれが微妙に関わりあうことになる。

鷗外が美学上の問題でハルトマンに引かれた理由は、比較的明瞭である。鷗外自身が次のように述べているからだ。

われ新声社創立の事にあづかりし頃、ゴットシャルが詩学に拠り、理想実際の二派を分ちて、時の人の批評法を論ぜしことありしが、今はひと昔になりぬ。程経て心をハルトマンが哲学に傾け、其審美学の巻に至りて、得るところあるものゝ如し。

(「逍遙子の新作十二番合評中既発四番合評、梅花詞集及梓神子(讀賣新聞)」、「柵草紙」二四号、明治二四年九月二五日)

平生少しく独逸語を解するを以て、たまくハルトマンが審美学を得てこれを読み、その結象理想を立て、世の所謂實際派をおのが系中に収め得たるを喜べるあまりに、わが草紙を機関として山房論文を作るに至りぬ。

(「逍遙子と烏有先生と(早稲田文学第九号及第十号)」、「柵草紙」三〇号、明治二五年五月二五日)

新声社創立のころ(明治二二年ごろ)は、ゴットシャルにしたがつて、理想派、實際派の二派に分けることで文芸批評を行っていたが、その後、二元的分類の不毛さに気づき、ハルトマンの審美学に触れて、その二元的対立が止揚されたように感じた。結象理想(具体化した理想)という概念がそれで、これによって、實際派を理想という概念で

説明できるようになった。そこでうれしさのあまり山房論文を作るようになった。

二つの鷗外の言葉をつなぎ合わせると以上のようになるだろう。要するに、理想主義と實際主義との統一にハルトマン美学の魅力を感じたということである。これはほぼ定説となっている。⁽¹⁾

このことは、明治二九年の回想であるが、よく引かれる『月草叙』の次の一節を見るとよりはっきりする。

ハルトマンの審美学は、特にその形而上門の偉観をなすのみでなく、その単一問題に至つても目下最も完備して居るのだ。それだから此審美学からは、第十九世紀の文学美術を見ても、自然派の中の存活の価のある側は、その頗る進歩した具象理想主義で包容して居る。進んで新理想派の製作はどうかといふに、たとひ技巧上に昔の所謂理想派に殊なるところがあつても、自然派の遺物と見られる分子が残つて居るところがあつても、固よりこれを包容して余あるのだ。

このようにハルトマンの美学は、理想・實際(自然)の二派の対立を止揚するのみならず、最も完備していて、實際の批評に応用がきき、自然派でも新理想派でもさまざまな芸術を包括して説明することができるからだ、と考えていたことが分かる。

美学については、今はとりあえず右の結論で満足するとして、哲学についてはどうだろうか。

最初の引用文では、理想・実際の文芸批評が「ひと昔」になってから、ハルトマンの哲学に心を傾けて、その中の美学に接するという書き方である。単に時間的前後関係を言っているのか、因果関係を含めて言っているのか微妙だが、因果関係を含めて言っているとすれば、理想・実際の二元的分類に疑問を抱いた結果、ハルトマンに哲学にその統一を期待して読んだという解釈が許されるであろう。後の引用文では、ドイツ語が分かるのでたまたまハルトマンの美学を読んだというだけで、哲学は出てこない。

このあたりになると先行論によって見方に微妙な違いがある。神田孝夫氏は『無意識の哲学』と『美の哲学』とは、明治二三年春から同時に鷗外によって読み進められたとしているが、小堀桂一郎氏は先に『美の哲学』を読み、その後、『無意識の哲学』に向かったとしている⁽³⁾。両氏とも、鷗外は没理想論争開始時までに『無意識の哲学』を自分のものにしており、この書物に見られるダーウィニズム批判が没理想論争での鷗外の立論の一つの重要な基礎になっているという点で共通しているが、小堀氏は、どちらかというところ、完備した美学である『美の哲学』に引かれるうち『無意識哲学』に進んでいったという考えかたのようであるが、神田氏は、逆に、『無意識の哲学』を読み進めるうち、そのダーウィニズム批判に共鳴し、極度な観念論者となって、観念論哲学に支えられた美学である『美の哲学』に心酔したのであるとばかり説いている。さらに、鷗外自身がハルトマンを勝手に観念化する⁽⁴⁾こともあつたと指摘している。

すなわち、神田氏にしたがえば、鷗外は、『無意識の哲学』を読み

進むうち、ダーウィニズム批判の書物であることを知り、それに引かれたがゆえに『美の哲学』にも引かれた、こういうことになるわけだ。ただし、鷗外が『無意識哲学』を読んで、それがダーウィニズム批判の書物であることを知りえたのは、神田氏が説くように、明治二三年、すなわち、鷗外が帰朝した翌年のことであつたのだ⁽⁵⁾。これに対して、『美の哲学』は一八八七年の発行であり、物理的には、在独中に読むことも可能であつたが、両氏とも二三年以降に読んだものと推定して居る。論者も同意見である。

二、『西洋哲学史』の記述①

以上のように、鷗外が『美の哲学』『無意識哲学』に引かれた理由は、どちらが先かという問題、および、それに付随して起こる鷗外のそれぞれに対する思いの違いといった問題こそあれ、ほぼ明らかである。『美の哲学』は観念論哲学に基づく完備した美学書、『無意識哲学』は、『美の哲学』の著者によるダーウィニズム批判の観念論哲学の書物ということである。

だが、これはいづれも鷗外が帰朝したのち、それぞれの書物を丹念に読み込んでからのことである。鷗外はそれ以前に、ドイツでハルトマンについての何らかの知識を得ていたはずだ。そうでなければ、こうした大部の書物を購入するはずはない。

もっとも、神田氏は、鷗外はショーペンハウアーもハルトマンも、一種の哲学的教養として読もうとしていたのであつて、まさに『月草

「叙」で言われる「第十九世紀は鉄道とハルトマンとを生んだ」ように、高名な哲学者であったからこそ、ハルトマンの著書を購入していたのに過ぎなかったのだとの見方を示しているが、果たしてそうだろうか。

ところで、神田氏は、鷗外の哲学の勉強に資した書物としてシュヴェーグラの『西洋哲学史概説』（氏の論では『哲学史要』）をあげている。氏によれば、鷗外がショーペンハウエル、ハルトマンへと哲学の勉強を進めていったのは、この書物に指針を仰いでいたからであって、特に厭世哲学に興味を抱いていたからではないとのことであるが、この書物の中ではハルトマンはどのように扱われているのだろうか。

すでに知られているように、東京大学図書館蔵鷗外文庫鷗外手沢本 Albert Schwieger : *Geschichte der Philosophie im Umriss* 1887には、鷗外自身による書入れや施された下線が多数存在しており、その一部はハルトマンにまで及んでいる。本書は、岩波文庫に翻訳（谷川徹三、松村和人訳『西洋哲学史』上、下、岩波書店、初版昭和一四年、改版昭和三三年）があるが、訳者が序文で説明しているように、シュヴェーグラ自身筆を採ったのは、ヘーゲルまでで、それ以後は改訂者などの筆になるものなので、訳出しなかったという。したがって、鷗外手沢本というとショーペンハウアーとハルトマンの部分の翻訳がない。

そこで本稿では、ハルトマンについての『西洋哲学史』の記述を必要に応じて抄訳しながら、鷗外が『西洋哲学史』から得ていたはずのハルトマンについての知識を復元していきたいと思う。

まず、ハルトマンの経歴をみよう。

カール・ロベルト・エツワルト・フォン・ハルトマンは、ベルリンで一八四二年一月に生まれた。ギムナジウムでの教育を終えた後、軍人としての道を選び、一八五八年には生まれた街の砲兵隊の近衛連隊に入った。年を経ずして、彼は健康上の理由でこの職務を断念せざるを得ないと思い、そこで、大学に入ることをなしに、ひたすら学問に身を捧げることにした。彼は、ベルリンの在野の学者として生きたのである。彼の最初の、すでに一八六四年に取り掛かっていた、主著である『無意識の哲学』は、一八六九年に刊行され、彼の名声の基礎を築いた。ハルトマン自身はこの著作を彼の全体の仕事の単なる概略とみなしていた。そして、彼は、その他の刊行物を自分が引き受けた責任の分割払いとみなしていたのである。われわれの哲学者（ハルトマンのこと。坂井注）の倦むことなき仕事と著作と、彼が仕事をなした驚くべき軽やかさは、いまやまったくその責任を消してしまった。一八年の短い間にハルトマンはたくさんのジャーナリズムの論説でその清算をしたのである。すなわち、二十以上の著作が公刊された。その中には百科全書的な『無意識の哲学』（第九版）のほかに、三つの大部の著作がある。すなわち、『道德意識の現象学』（一八七九年）、『発達段階における人間の宗教的意識』（一八八一年）、そして『カント以来のドイツ美学』（一八八六年）である。これらの主要な著作の周囲に、その他のハルトマンの著作が並んでいる。そして、これらは以下のように分類される。すなわち、①方法論

と認識論に属するもの（『弁証法について』（一八六八年）、『超越的リアリズムの批判的基盤』（一八七八年）、②自然哲学に属するもの（『ダーウイニズムにおける真実と虚偽』（一八七五年）、『生理学と進化論の立脚点から見た無意識』（一八七七年）、そして、③精神哲学に属するものである。第三の分類の中ではさらに細分する必要がある。すなわち、倫理的なもの（『歴史と厭世主義の基盤について』（一八八〇年）、宗教哲学的なもの（『キリスト教の自己崩壊』（一八七四年）、『現代神学におけるキリスト教の危機』（一八八〇年）、『精神の宗教』（一八八二年、上記の偉大な宗教哲学的業績と呼ばれるものは、ひとつの総体をなしている。）そして、美学的な著作である。第四の分類を形成しているのが批判的で論争的なものである。（『新カント主義、ショーペンハウアー主義、そしてヘーゲル主義』（一八七七年）、『教会人の認識論的リアリズム』（一八七五年）。そのほかに異なった内容の論文をもった三つの作品集と呼ばれているものがある。すなわち、『研究および論文集』（一八七六年）、『現在の哲学的な疑問』、そして『現代の問題』（一八八六年）である。

Karl Robert Eduard von Hartmann ist geboren zu Berlin im J. 1842. Nach absolviertem Gymnasialstudium waelhte er die militaerische Laufbahn und trat in das Garderegiment der Artillerie seiner Vaterstadt. Aus Gesundheitsruecksichten sah er sich schon nach wenigen Jahren genoetigt, den Dienst aufzugeben, und widmete sich, ohne eine Universitaet zu

beziehen, ganz der Wissenschaft. Er lebt als Privatgelehrter in Berlin. — Sein erstes, schon 1864 begonnenes Hauptwerk, die “ Philosophie des Unbewussten”, erschien im J. 1869. und begruendete seinen Ruhm. Hartmann selbst betrachtet dieses Werk als ein blosses Programm seiner gesamten Thaetigkeit, und seine uebringen Veroeffentlichungen als die Abschlagszahlung auf die uebernommene Verantwortlichkeit. Bei der rastiosen Thaetigkeit und Produktivitaet unseres Philosophen, und der erstaunlichen Leichtigkeit, mit der er arbeitet, ist seine Schuld nun bald getilgt. In der kurzen Zeit von achtzehnen Jahren hat Hartmann, — zahlreiche Journalistikel abgerechnet, — ueber zwanzig Schriften veroeffentlicht, darunter, ausser der encyklopaedischen “ Philos. d. Unb.” (9 Aufl. 1882), drei umfangreiche Werke: “ Phaenomenologie des sittlichen Bewusstseins”(1879), “ das religioese Bewusstsein der Menschheit im Stufengang seiner Entwicklung” (1881) und “die deutsche Aesthetik seit Kant” (1886). Um diese Hauptwerke gruppieren sich die uebringen Schriften H. s, und lassen sich einteilen in solche, die : 1) zur Methodologie und Erkenntnistheorie (Ueber die dialektische Methode”, 1868; “Kritische Grundlegung des transscendentalen Realismus”, 1878), 2) zur Naturphilosophie (“ Wahrheit und Irrtum im Darwinismus”, 1875; “ Das Unbewusste vom Standpunkt der

Physiologie und Descendanztheorie”(1877) und 3) zur Geistesphilosophie gehoeren. In der dritten Gruppe muss man wieder unterscheiden: die ethischen (“ Zur Geschichte und Begründung des Pessimismus”, 1880), die religionsphilosophischen (“ Die Selbstzersetzung des Christentums”, 1874; “ Die Krisis des Christentums in der modernen Theologie”, 1880), “ Die Religion des Geistes”, 1882; die mit dem oben genannten grossen religionsphilosophischen Werk ein Ganzes bildet) und die aesthetischen Schriften. Eine vierte Gruppe bilden die kritischen und polemischen (“ Neukantianismus, Schopenhauerianismus und Hegelianismus”, 1877; “Kirchmanns erkenntnistheoretischer Realismus”, 1875). Ausserdem sind zu nennen drei Sammlungen von Aussaetze“(1876), “ Philosophische Fragen der Gegenwart”(1885) und “ Moderne Probleme”(1886). (引用にあたってaなどはae, Bはssと改めた。)

この後、ハルトマン研究のための参考書があげられているが、略す。略歴を見ただけでも、当初、軍人の道を選んだこと、大学に抛らずに野の学者としての人生を選んだこと、旺盛な批評活動を行ったことなど、後の鷗外との類似を見ることができようが、『無意識の哲学』を筆頭にハルトマンの著作は膨大な量であり、さまざま領域に渡っていたことが分かる。

ここではシュヴェーグラーはそれらを四分している。第一は、方法

論と認識論に関するもの、第二は、自然科学に関するもの、第三は、精神哲学に属するもの、第四は、批判的で論争的なものである。このうち第一の超越的リアリズムは、ハルトマンの認識論の骨子で、われわれは経験的知識を積み重ねてゆくことで、超越的な存在の認識に達することができるといふもので、科学者としての鷗外にとっては、納得のゆくものだっただろう。⁽⁹⁾

第二に属する『生理学と進化論の理論の立脚点から見た無意識』が神田氏も指摘するように問題の著作で、ハルトマンが匿名でダーウィニズムの立場に立つて、自分の『無意識の哲学』を批判し、その批判が世に受け入れられたところで、『無意識哲学』の第二版を出し、その中で匿名を明かした上で、『生理学と進化論の立脚点から見た無意識』を批判して、結果的に自分の『無意識の哲学』の論拠を強めようという、手の込んだやり口をもった著作である。鷗外が手にしていた『無意識の哲学』は、最初の版ではなく、当初の『無意識の哲学』にこの反論と反論に対する反論とが併せ取られたものであった。だが、鷗外がこれを読むのは、神田氏の言うように帰朝後のことだ。

第三については、二つの点に注目したい。一つは、キリスト教批判の著作が目立つことである。キリスト教教会の権威に反抗したハルトマンの姿勢の現われといえる。もう一つは、美学的著作の扱いである。シュヴェーグラーはほとんど重視していない。おそらくは鷗外もこの書物を見た時点(明治二〇年秋)では、ほとんどハルトマンの美学に着目することはなかっただろう。

第四については、鷗外のその後の評論活動を考える上で興味深い。

鷗外が実際に手にしたかどうかは不明だが、紹介されている『現代の問題』を見ると、「われわれは何を食べるべきか」では、草食と肉食の問題（ヘジタリアンの問題）を論じているし、「大学の講義の改革のために」などというのもあり、実に多岐にわたっている。こうした論争好きの態度は後の鷗外には通じるものがある。

要するに、ここまでの記述で鷗外が注目したであろうことは、ハルトマンの経歴、今評判の無意識哲学を唱えている人であり、反キリスト教会な立場をとり、ジャーナリストとしてさまざまに論争を展開している人らしい、ということだろう。

三、『西洋哲学史』の記述②

それではその「無意識」とはどのようなものとして説明されているのだろうか。

世界の實在は、盲目で非理性的な意志であるということは、ハルトマンにとって確実である。その限りでは、彼はまたショーペンハウアー主義者である。しかしながら、世界は、単に現実的であるばかりではなく、またイデアに満ち、合目的なものである。そして、合目的性の原理は、これについては、新しい哲学においては、誰もヘーゲルのように勝利を持って擁護したものはいないのだが、理性なのである。このことはハルトマンにとって少なからず確実なものと考えられている。そして、その限りにおいて彼

はヘーゲリアンなのである。

Das das Reale der Welt der blinde unvernünftige Wille ist, steht fuer Hartmann fest; insofern ist er also Schopenhauerianer. Aber die Welt ist nicht bloss real, sondern auch ideerfuellt, zweckmaessig, und das Prinzip der Zweckmaessigkeit, das in der neueren Philosophie keiner so siegreich verfochten wie Hegel, ist die Vernunft. Diese steht fuer Hartmann nicht minder fest, und insofern ist er Hegelianer.

世界の實在「無意識」とは、ショーペンハウアーの生への盲目の意思であるが、一方では、ヘーゲルのイデアのように論理を持ったものだ⁽⁸⁾というのである。

ただし、話はそんなに簡単ではなく、シェリングとのかかわりについても言及している。

このような絶対者の解釈においてハルトマンは、無意識の精神を積極哲学の出発点としたシェリングを継承している。そこでハルトマンは、彼自らもまた名づけたようにショーペンハウアー主義者であり、ヘーゲル主義者であり、シェリング主義者であるが、七十年代のそれなのである。この補足、すなわち「七十年代」は、一つの大きな意味を持っている。この補足とは次のような意味なのだ。われわれの時代のショーペンハウアー主義者はまたヘーゲ

ル主義者であることが必要でなければならず、引き返して、同時にシェリング主義者でもあるならば、どちらの立場のものも同じ前提の下にありうるのだ。

シェリングは彼の無意識の精神の原則を方法的に基礎付けなかった。だから、それを実行することが価値のあることなのであって、そこにハルトマンは自らの課題を見出したのである。

In dieser Auffassung des Absoluten folgt Hartmann Schelling, der den unbewussten Geist zum Ausgangspunkt seiner positiven Philosophie gemacht hat. So ist Hartmann, wie er auch selbst sich nennt, Schopenhauerianer, Hegelianer und Schellingianer, aber der 70er Jahre. Dieser Zusatz: "der 70er Jahre" hat eine grosse Bedeutung: er besagt, dass ein Schopenhauerianer unserer Zeit notwendig auch ein Hegelianer sein muss, und umgekehrt, und dass man beides nur unter der Bedingung sein kann, wenn man zugleich auch Schellingianer ist.

Schelling hat sein Prinzip des unbewussten Geistes nicht methodisch begründet. Jetzt gilt es, dies zu erfüllen, und darin erkennt Hartmann seine Aufgabe,

ここでは「七十年代」のシェリングの「積極哲学」という概念が鍵になっている。これは『西洋哲学史』のシェリングの項目で説明されていることであるが、シェリング晩年の哲学で、一口でいうと、それ

までの哲学が神を求めて思索したのであり、いわば神なしに思索したのに対し(消極哲学)、消極哲学の最後に見出された神を原理として、神からすべてが導き出される場合、すべてがどのような形をとるかを示す(積極哲学)ものだといっているのである。(同書同項目参照)

いま、「神」という言葉を使ったが、引用文の説明と照らし合わせると、「神」というより絶対者といった方が適当かもしれない。

それまでのシェリングの考え方は、本質の世界と現象の世界は二つに切り離されていて、絶対者は本質の世界の中に静的に存在しているだけであつたから、現象の世界には現れていなかった。そして、絶対者がいかにして現象世界に現れるかを説明できなかつた。つまり、二元論に陥っていたわけである。シェリング晩年の積極哲学では、この二元論を克服している。というのは絶対者は現象の世界に現れているとの前提に立っているからだ。『西洋哲学史』は、この積極哲学をヘーゲル哲学に非常に近いものであるとしている。

さて、シュヴェーグラーは、この絶対者にハルトマンがどのような説明を与えているといっているだろうか。

絶対者としての無意識が唯一の真に存在するものであるならば、それは以下のようなことになる。第一に、世界は、単にその現れであり、明瞭になつたものであり、現象したものに過ぎず、カント主義者の意味ではなく、ヘーゲル主義・ショーペンハウアー主義者の意味、すなわち、絶対者の客観性である。したがって、第二に世界の目的は絶対者自身以外のそれ以外の何ものでもない。

言葉を変えていふならば、世界は単なる手段なのであって、どの手段を通して、世界に内在的絶対者（それを我々は神と呼ぶこともできる）がその目的を達成しようとしているものなのである。Wenn das Unbewusste als das Absolute das allein wahrhaft Seiende ist, so ist, erstens, die Welt nur seine Erscheinung, Offenbarung, ein Phänomenon, nicht im Kantischen, sondern Hegel=Schopenhauerschen Sinne, d.h. Objektivitation des Absoluten; so ist, zweitens, der Zweck der Welt kein anderer als Absolute selbst. Mit anderen Worten: die Welt ist nur das Mittel, durch welches das der Welt immanente Absolute (das wir ebensogut Gott nennen koennen) seine Zweck erreicht.

「神」と呼ぶかどうかはともかくとして、絶対者は現象世界に現れている、あるいは、現象として現れている、この一元論的発想がハルトマンの基本的発想であり、先の、「七十年代のシェリング哲学」というのは、これを指しているわけだ。つまり、先の引用の「われわれの時代のショーペンハウアー主義者は、ヘーゲル主義者でなければならず、引き返して、シェリング主義者でなければならぬ。」という言は、一元論でなければならぬし、絶対が現象に姿を現しているという前提でものを考えなければならぬが、その絶対の性質については、ヘーゲルのように論理的なイデーに違いないとか、ショーペンハウアーのように盲目の意志であるとか、一義的に決めないほうが良い

ということであろう。

ハルトマンの哲学はよく厭世哲学といわれるが、このような世界観は、別の言い方をすれば、認識論といつてもいいかもしれないが、非常に楽観的、あるいは、常識的・科学的だといつてよいだろう。現実の世界の中に、絶対者が現われているというのであるから。そして、現実の認識はそのような絶対者の認識につながるはずだということになるのだから。

すなわち、鷗外がハルトマンに引かれた最大の原因はここにあったと考えられる。『西洋哲学史』三六〇頁下段には次のような書入れがある。

Wille-Schopenhauer-Reales

Hartmanische=Geist

Vernunft-Hegel-Ideales

ハルトマンの「精神」は、二つの性質を持っている。一つは、ショーペンハウアー的なイデーとしての実在的な側面であり、もう一つはヘーゲル的なイデーとしての理性的な側面である、といった意味であろう。ドイツ観念論の思想家であるショーペンハウアーの思想にRogge(実在的・現実的)という説明が加えられるのは一見奇異に思えるかもしれないが、『西洋哲学史』では、二元論に陥っていたころのシェリングにも、同じ説明が与えられている。要するに、現象世界に理性的なものが現れていない、という考え方を指すようだ。

このように見てゆくと、鷗外がハルトマンに引かれていった理由が分かる気がする。神田氏の言うように反ダーウィニズムであった、というのはもちろんだが、それは帰朝後のことで、まず、鷗外は、現象に本質的世界が現れているという考え方に引かれたのである。

かつて、磯貝英夫氏は、戦鬪的啓蒙批評時代の鷗外について「学問信仰」という語で評したが⁹⁾、その源はこのあたりに求められるかもしれない。

なお、論じ残したことは多いが、稿を改めて取り上げたい。

〔注〕

- (1) たとえば、小堀桂一郎『森鷗外―文業解題 翻訳篇』(岩波書店、一九八二年) 参照。
- (2) 神田孝夫「森鷗外とE・V・ハルトマン―『無意識哲学』を中心に―」『島田謹二教授還暦記念会 比較文学比較文化』(弘文堂、昭和三十六年)
- (3) 小堀桂一郎「森鷗外とE・V・ハルトマン」吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』(清水弘文堂、昭和四六年)
- (4) 坂井健「観念としての「理想(想)」―鷗外「審美論」における詠語の問題を中心に―」(『日本語と日本文学』一六号、一九九二年三月)は、この観念化が、ハルトマンの原文では美は心の中にイメージとしてのみ存在する心理的・観念的(イデアル)と書かれている部分を鷗外が「理念的(イデアル)」と解釈したことに由来すると説いた。
- (5) 神田氏は、『妄想』の一節を引きながらも、東京大学付属図書館所蔵の鷗外庫本の発行年が一八九〇年(明治二十三年)の刊行であることを指摘し、『妄想』の中でベルリンで初めて哲学の書物を紐解いた時のことを回想した次の一節が、鷗外のフィクションであると説いている。或るかういふ夜の事であった。哲学の本を読んで見ようと思ひ立

つて、夜の明けるのを待ち兼ねて、Hartmannの無意識哲学を買ひに行つた。

- (6) 坂井健「森鷗外とE・V・ハルトマン」(『日本語と日本文学』一二号、一九八九年一〇月)

- (7) この点については別稿を予定している。

- (8) この部分と没理想論争における鷗外の発言「鳥有先生はまた逍遙子の没理想の論を駁してはいはく。世界はひとり実なるのみならず、また想のみちくたるあり。逍遙子は没理性界(意志界)を見て理性界を見ず。」「早稲田文学の没理想」明治二十四年二月二十五日)との類似を見ることできるかもしれない。

- (9) 磯貝英夫「啓蒙批評時代の鷗外(上)―その思考特性―」(『文学』四〇号、一九七二年一月)

〔付記〕

本稿は、平成一六年度佛教大学海外研修による成果の一部である。

(さかい たけし 人文学科)
二〇〇五年十月十九日受理